



Title	日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究：日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大西, 由美
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第11425号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/55402">http://hdl.handle.net/2115/55402</a>
Rights(URL)	<a href="http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yumi_Onishi_abstract.pdf (「論文内容の要旨」)



[Instructions for use](#)

## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：大西由美

### 学位論文題名

## 日本語学習者の動機づけに関する縦断的研究

### —日本語接触機会が少ない環境の学習者を対象に—

本研究は、ウクライナの大学で日本語を専攻する大学生を対象として、動機づけの構造、および変化を明らかにするために様々な検討を行った。ウクライナは日本語接触機会が少ない環境である。接触機会が多い環境に比べ、動機づけが維持されにくいと考えられ、「高学年になると意欲が下がる」と言われている。そのような環境において、動機づけがどのように変化しているのか、変化の要因は何かについて、明らかにすることが本研究の目的である。

本研究では、まず第二言語学習者の動機づけの理論的背景を概観した。日本語学習動機研究における現在までの約 50 件ある先行研究のレビューを行った。これらの研究が、質的・量的どちらの方法で行われているのか、どのような理論に基づいているのかについて、特徴を記述した。従来の動機づけ構造研究よりも、広い枠組みで動機づけを捉えるべく、鹿毛(1995)の三つの学習意欲（内容必然的・状況必然的・自己必然的学習意欲）に基づく分類を援用し、内発的・外発的動機づけ、統合的・道具的動機づけ、達成目標理論などを整理し、本研究の方向性を示した。

本研究は、2つの予備調査と、4つの研究から構成される。

予備調査では、ボトムアップ方式による項目収集を行い、KJ法を用いて尺度を構成した。尺度の妥当性、信頼性においても検討を行った。先行研究の尺度になく、予想されていなかった項目が 11 あった。従来の方式では得られなかった項目を用い、対象地域の実情に即した尺度を構成した。

「研究 1」では、因子分析を行い、学年層別(1、2年生の低学年と、3～5年生の高学年)の動機づけ構造が以下のように異なることを示した。

低学年：日本語日本文化志向・将来実用志向・挑戦志向

高学年：日本語日本文化志向・キャリア志向・語学学習志向

低学年の将来実用志向が自己必然的学習意欲のひとつの条件必然的であるのに対し、高学年のキャリア志向では条件必然的のみではなく、もうひとつの自己必然的学習意欲である関係必然的な動機を含んでいることが明らかになった。また、自己必然的である低学年の挑戦志向は、向上志向に加え、内容必然的な動機も含んでいるのに対し、高学年の語学学習志向では、多く

の言語を話すことなど、内容としての日本語と関連しない動機となっている。

「研究 1」では、以下の 3 点が明らかになった。

- ・低学年と高学年では動機づけの構造が異なる
- ・内容関心的動機から非内容関心的動機に移行している
- ・学習状況の変化が動機づけ低減に直接関連するのではなく、状況の変化が孤立環境の社会的文脈と結びついていることが関連している

「研究 2」では、自己評価、目標、目標達成見込みを尋ね、動機づけとの関連を検討した。高学年の個人差を見るために、「研究 1」の因子得点を基にクラスター分析を行った。

明らかになったのは以下の 6 点である。

- ・高学年では、動機づけ傾向によって、目標と目標達成見込みに違いがある
- ・すべての動機が高い群は、目標も達成見込みも高く、意欲的に学習している
- ・語学学習志向のみが低く、日本語日本文化、キャリアに関する動機が高い群は目標を調整し、達成見込みを高く保っている。また、達成見込みが有能感に影響を与えている
- ・語学学習志向のみが高く、文化とキャリアに関する動機が低い群は、達成見込みが低い
- ・達成見込みの低さが、「高学年になると意欲が下がる」ことに繋がる可能性がある
- ・日本語日本文化志向が低いことは、再動機づけに繋がりにくい

「研究 3」では、以下の問を設定し、試験の結果に対する原因帰属について尋ね、動機づけとの関連を検討し、学年層別に比較を行った。

分析の結果、次の 4 点が明らかになった。

- ・試験の成否の原因を「努力」に帰属する傾向が見られる
- ・「能力」の高低が成否に影響していると考える学習者の比率が低学年と高学年で異なる  
低学年では、結果が悪かった際に能力に帰属する度合いが低く、良かった際に能力に帰属する度合いが高い  
高学年では結果が悪かった際に能力に帰属する度合いが高く、良かった際に能力に帰属する度合いが低い
- ・高学年で、結果が悪かった際に外的要因に帰属している学習者は、日本語日本文化志向が低く、継続意志も低い傾向が見られる
- ・結果が良かった場合にも、外的要因である「教師の教え方」に帰属している

「研究4」では、質問紙調査継続参加者を対象にインタビューを行った。自己評価の高低、実際の能力の高低とで、対象者を4つに分類した。インタビューでは、普段の学習行動や、動機づけが低減した経験とその際に再動機づけをどのように行ったかを尋ねた。「自己評価高×能力高」「自己評価低×能力低」という従来の研究でgood learner、bad learnerとして分析されてきた学習者のみではなく、自己評価と実際の能力にギャップがある学習者についても分析をした。自己評価が実際の能力よりも高い2名の学習者は、努力は必要だと認識しているが、学習時間も短く、行動と結びついていないことが共通していた。自己評価が実際の能力よりも低い場合には、外国語能力が高く、基準が高くなっているため、日本語に対する有能感が非常に低いこと、目標は高いが、達成見込みが低下していること、他言語へ関心が移っていることを指摘した。そのため、有能感を高めることの重要性が示唆された。

「研究1」の結果から、低学年と高学年では動機構造が異なることが明らかになったが、高学年では特に個人差が大きい。低学年であまり学習者間の差がなかった動機構造は、高学年にな

ると、動機の濃淡の個人差が強くなると考えられる。「高学年になると、意欲的に学習できない」と先行研究で報告されてきた学習者の特徴としては、内容に関する動機が薄れ、他言語へと関心が移行していることが示唆された。試験の結果が悪かった場合の原因を「能力」に帰属しているが、有能感の低さとも関連し、失敗時に能力の低さを示してしまうことを避けようとする学習放棄に結びついている可能性がある。

反対に、意欲的に学習していると考えられる群は、全体の動機が高く目標も達成見込みも高く持っている学習者群と、内容に関する動機を維持し調整された目標に対する達成見込みを高く持っている学習者群の二つである。特に、後者の分析を通して、達成見込みを低減させないことは、有能感の高さにも繋がり、達成可能であると思える目標を持つことの重要性が示された。

しかし、自己評価と実際の能力に差がある学習者においては、すべての動機が高くても、学習行動が生起していない事例が見られた。自己評価が高すぎる場合には、自己評価視点が欠如し、どのように学習しているのか理解していない可能性がある。またはレベルの参照先が教室内の学習活動のみである可能性が考えられる。一方、能力が高くても、自己評価が低く有能感が低い場合には、学習行動に繋がらないという事例も見られた。

以上より、学習年数が上がるにつれて、動機の構造が変化すること、動機構造の違いのみが、動機づけの高さに繋がるのではなく、自己評価や目標、その達成見込み、有能感も関連していることが示された。内容に関連する動機づけを低減させないこと、自己評価視点を持つこと、有能感を高く保つこと、達成可能と思える目標を持つことが、学習を意欲的に継続させる上で重要であるという教育的示唆が得られた。

(以上)